

【野菜】

1. 概況

平成18年は、前の12月に引き続き1～2月は低温気味で、最低気温は1～3℃も下回り、原油価格高騰と暖房用燃料消費の増加により、施設の果菜類を中心に生産コストが上昇した。一方、4月以降は平均気温が平年値をやや上回り、最高気温が1～4℃高く推移した。特に夏季は35℃を上回る高温となり、施設の軟弱野菜等の生産が不安定となった。降水量は平年値を上回ったが夏季の集中的な豪雨が特徴的であった。また、9月17日に台風13号が来襲し、佐賀、長崎、福岡を中心に、ハウス倒壊やハウスピーネル破損、茎葉損傷の発生、潮害等の大きな被害を受けた。10月は、晴天が続き生育が促進され、生産が過剰気味となった。11月中旬以降は曇雨天が多く、施設の果菜類では株の成り疲れと重なり生産量が減少した。本年度は、安定生産という面では厳しい気象環境であった。

2. 果菜類

1) 促成イチゴ（福岡、佐賀、長崎、大分、熊本、鹿児島）

品種動向：福岡は「あまおう」、佐賀は「さがほのか」となり、他県でも、「とよのか」にかわり、「さがほのか」が増加傾向にある。「さちのか」は長崎で多く、熊本では「ひのしずく」が増加している。新品種に対する期待は相変わらず大きい。

平成17年度産：低温の影響でやや遅れたが1月～3月の出荷は順調であった。

平成18年度産：育苗期の夏季に高温・多雨で推移し、炭疽病が多発した。促成作型の花芽分化は順調であったが、9月の台風により、定植がやや遅れた。普通作型では、台風による定植の影響は少なかったが、10月の高温により、第1次腋果房までの葉数が増加した。12月の出荷は順調である。乾燥気味でハダニの発生が多かった。カブリダニ類の天敵利用が徐々に普及している。高設栽培は、価格の低迷等により、新規導入等が鈍化している。

2) トマト

冬春栽培（福岡、佐賀、長崎、熊本、宮崎）：促成栽培では「ハウス桃太郎」「感激73」「麗容」等、品種が多様化している。平成17年度産は、低温等により影響を受け1月～3月の出荷量が減少したが、その後の気温の上昇とともに生産は回復した。病害虫等の被害は少なかった。平成18年度産は、育苗期の高温による第1花房着生節位の上昇、台風被害、12月の低温による生育停滞が一部でみられたが、大きな影響もなく順調に生育している。交配用のクロマルハナバチの普及も一部で進みつつある。

夏秋栽培（大分）：品種は、夏秋では桃太郎シリーズの「8」、「ファイト」、「夏美」が栽培されている。隔離床の養液土耕栽培の普及も一部で進みつつある。

トマト黄化葉巻病：沖縄で平成19年1月にトマト黄化葉巻病が確認されるなど、九州沖縄全域に拡大しているが、防虫ネットや薬剤防除等の徹底により、被害は軽減している。

3) ナス

促成栽培（福岡、佐賀、熊本）：「筑陽」の接木栽培（台木品種「台太郎」「トナシム」等）が行われている。平成17年度産は、低温の影響で1月の生産が低下した。3～4月も低温と曇雨天の影響で灰色カビ病の発生が多かった。総収穫量は昨年並であった。平成18年度産は、台風の影響で定植後の活着が悪く、厳寒期に樹勢が弱まるなど12～1月の収穫量は少なかったが、その後は気温が高く推移し回復した。タバココナジラミバイオタイプQ、ミナミキイロアザミウマの発生がやや多い。

夏秋ナス（熊本）：定植後の5月の天候に恵まれ生育は良好であったが、6～7月の日照不足、9月の台風の影響を受けて、出荷量はやや減少した。

4) ピーマン

促成栽培（宮崎、鹿児島）：平成17年度産は、1～3月にうどんこ病やアザミウマ類等の発生がみられ、一部の地域で黒枯れ病の発生がみられた。また、低温管理による石果の発生もみられた。スリップスやコナジラミ類の発生も多かった。

平成18年度産は、10月からは晴天により着果量が多かった。一部で、かん水不足、青枯れ病、黒枯病（仮称）の発生がみられ、害虫ではアザミウマ類やコナジラミ類の発生もみら

れた。12月には曇天が多くなり、草勢が弱まり、うどんこ病や軟腐病の発生がみられた。アザミウマ類の発生は多かった。

夏秋栽培（大分）：品種は「さらら」「みおぎ」が栽培されている。定植後の低温、梅雨期の低温・寡日照で初期収量が少なく、8月からタバココナジラミのバイオタイプQが各地に蔓延した。平年作の約85%となった。

5) キュウリ

促成栽培（福岡、宮崎）：病害虫の発生の多い作物であり、0.4mm目合いの防虫ネットを設置するハウスが増えている。一部で黄化えそ病が、また生理障害の黄化症が発生した。

抑制栽培（佐賀、福岡、宮崎）：台風被害により、一部で植え替えをした。秋の天候が良く10月下旬に収穫果実が集中し、逆に11月以降の草勢の低下が著しかった。

夏秋栽培（熊本）：定植後の活着、その後の生育は順調であったが、6～7月は日照不足となり、その後の出荷量は減少した。9月中旬の台風による被害が発生した。

6) メロン（熊本）：（春夏作）前年12月の寒波で活着が遅れ、交配期の日照不足、果実肥大期の低温で出荷が遅れ、小玉傾向になった。（秋冬作）9月の台風の影響を受けたがおおむね良好であった。一部の地域で黄化症が発生した。

7) スイカ（熊本）：（春夏作）作付面積は徐々に減少傾向で、その中で小玉スイカが増加傾向となっている。

8) ニガウリ

沖縄：（促成栽培）品種は「汐風」が栽培され、生育は順調であった。（半促成栽培）品種は「群星」が栽培され、4月の曇天により遅延した。（普通栽培）品種は、施設で「群星」、露地で「島風」が栽培され、台風被害がなくほぼ順調であった。

長崎：平成10年より、いちご後作として施設ニガウリが導入され、品種は「えらぶ」である。

9) トウガン（沖縄）

促成栽培では「ヘルシーボール」、普通栽培では在来種が栽培され、作柄はほぼ順調であった。促成栽培には耐風性施設の導入が進んでおり、栽培面積は増加傾向にある。

10) インゲン

長崎：平成18年産では、台風13号の潮風害により生育被害を受けた。前年比の80%程度の出荷が見込まれる。作型は、露地抑制栽培が主体である。品種は「サーベル」、「スーパーライト」、「ステイヤー」等である。

沖縄：つる性種では「グリーンワンダー」、わい性種では「キセラ」「サーベル」が栽培されている。10月播種の発芽不良、高温障害による不稔莢等により年内出荷量が減少したが、作柄は全般に順調であった。

11) ソラマメ（長崎）

品種は、「陵西一寸」で、現行のU字四本仕立から、L字三本仕立てによる省力栽培が増加中である。やや作付面積は鈍化傾向である。

3. 葉根菜類

1) アスパラガス（佐賀、長崎、福岡）

品種は「ウエルカム」で、春芽は気象条件に恵まれ増収した。一方、夏芽は日照不足で減収した。福岡、佐賀は総収量はほぼ平年作であったが、台風の影響も加わって、長崎では夏芽の減収が大きく、総収量もやや減少した。スリップス対策に紫外線カットフィルム、ヨトウムシ対策に防虫ネット、高温対策にフルオープンハウス等の普及が進んでいる。夏芽の品質低下対策が品種選定も含めて検討されている。

2) ネギ

小ネギ（福岡、大分）：福岡では、周年用品種として「鴨頭」、夏用として「夏彦」、冬用として「冬彦」が主に用いられ、大分では、従来の固定種に加えてF₁品種の利用が拡大している。7～8月の高温による発芽不良で減収した。耐候性ハウス、UVCフィルム、防虫ネットの普及が進んでいる。

白ネギ（大分）：多くの品種が栽培されており、固定品種に加えてF₁品種が拡大して

いる。作柄は、平坦地域では7～8月の大雨，9月の台風，10月の干ばつで，非常に不良であった。なお，防蛾灯（黄色灯等）の利用が10haに導入されている。

3) タマネギ（佐賀，長崎）

極早生・早生が増加し，中晩生の作付けが減少傾向である。苗の生育は良好であった。定植は極早生・早生は順調であったが，11月の天候不順により中晩生の定植がやや遅れた。年内の天候が良かったので，極早生の生育が進んでおり，収穫も平年よりも10日程度早く，分球・抽台がやや多い。全自動のマルチ無マルチ兼用の定植機が平成19年度から普及する見込みである。

4) ニラ（大分）

品種は「スーパーグリーン」が主体である。夏作の出荷は，8月が減少したがほぼ平年並みであった。販売単価は昨年に比べ11%高かった。セル成型苗の利用やそれを用いた機械定植の導入が進んでいる。

5) ブロッコリー

長崎：露地野菜として，県北地域，五島，壱岐でブロッコリーが増加している。台風や12月の低温で生育に少し影響を受けた。

福岡：17年度産では，前年9～10月の乾燥で生育が遅れ，12月の低温と重なり年内の収穫量は半減し，遅れて3月上旬に大きな収穫のピークがきた。18年度産は，暖冬の影響で生育が2週間程度早く進み，12月～1月の収穫量が多くなり，3月は逆に減少する見込みである。

6) レタス（宮崎）

宮崎：10～11月の干天の影響を受けたが，畑灌を利用した場合には，平年並みの作柄であった。なお，かん水過剰の圃場で，契約規格より球が過剰肥大した場合があった。

福岡：暖冬で病虫害の発生が多いが，作柄は全般に良好である。しかし，単価が出荷当初から低迷している。

7) ニンジン

長崎：品種は，「向陽2号」が主体である。18年度産には「愛紅」，「敬紅」，「ベータ312」などが一部で導入された。冬ニンジンは，台風13号による塩害，風害の影響を受け，まき直しをするところもあった。その後に10月の水不足もあり，収穫は1ヶ月程度遅れ，収量も例年の30%以上減少している。

宮崎：10～11月の水不足で，晩夏～秋まきの肥大が悪かった。秋まきでは発芽しない圃場もあった。

8) ダイコン（宮崎）

熊本：（夏秋作）6～7月は曇雨天が多く，播種が遅れや根傷み等の被害が発生し，出荷量は減少した。9月中旬に台風13号の後は，順調な生育をした。品質も良好であったが価格は低迷した。

宮崎：10～11月の水不足で，晩夏～秋まきの肥大が悪かった。

9) キャベツ

熊本：（夏秋作）4～5月定植はほぼ順調で，6～7月定植では曇雨天が多く，定植が遅れ，根傷みも発生し，出荷量が減少し品質も低下した。9月中旬の台風13号の後は天候に恵まれ，出荷量はやや増加傾向となり，品質も良好であった。

宮崎：1月どりの作型では，低温の影響で平年より2～3週間収穫期が遅れた。

10) バレイショ（長崎）

平成18年度の春作では，5月上旬頃の少雨で肥大が鈍化し，その後の多雨で収穫の遅れや腐敗等が発生した。収穫作業が遅れるとともに，収量もやや減収した。秋作では，台風の影響で，出芽していた圃場に被害があり減収した。

11) 食用かんしょ（宮崎）

5～6月の日照時間が少なく，早掘（8～9月）では，品質は優れたが収量が前年比の約90%であった。